

徳島県立近代美術館

所在地 徳島県徳島市八万町向寺山

設置者 都道府県(徳島県)

登録博物館／美術博物館



「ユニバーサル美術館：話せば広がる鑑賞物語」展

2019年度実施

鑑賞・交流

年齢や障害の有無に関わらず誰もが楽しめる美術館を目指す同館は、2018年度からユニバーサル美術館展シリーズを継続開催している。2019年度の同展では“コミュニケーション”をテーマに物語性を感じさせる所蔵作品を選び、一人一人の感想や解釈を伝えあう交流型の展覧会に挑戦。手話やボディランゲージなどさまざまな方法で鑑賞者同士が対話しながら鑑賞する「みんなで語る鑑賞ツアー」など関連事業も多数実施した。

「体にやさしいユニバーサル展示：好きな目線で」展

2021年度実施

鑑賞・交流

2021年度のユニバーサル美術館展では“多様な視線”をテーマとして、車椅子利用者や歩行が困難な人も楽しめるように、車椅子の目線や小さな子どもの目線、立って見る、座って見るなど多様な視線から作品鑑賞できる展覧会のかたちを提案した。30cmの床上げステージや床置きサイン、テーブル高の展示台などさまざまな工夫をほどこすとともに、高低二段組みの解説パネルなども設けた。

あの手この手で交流トーク

2018年度、2019年度、2021年度、2022年度、2023年度実施
鑑賞・交流

徳島県立近代美術館では、ユニバーサルミュージアム事業で協働する「アートイベントサポーター」制度を設けている。サポーターには視覚・聴覚に障害のある人もいて、鑑賞支援グッズやコミュニケーション・ツールの開発・製作、鑑賞プログラムの企画・実施などに協力している。中でも、サポーターがナビゲーターとなって障害の垣根を越えて交流する本企画は館の看板イベントになっている。

取材日 2023年12月22日

回答者 竹内利夫(徳島県立近代美術館 上席学芸員)
笠井優(徳島県立近代美術館 主任学芸員)

「ユニバーサル美術館：話せば広がる鑑賞物語」展

ユニバーサル美術館展シリーズは

どのような経緯で立ちあげられたのですか？

当館では、2011年からユニバーサルミュージアム事業を手がけています。これは年齢や障害の有無に関係なく、誰もが美術館を楽しめるように、来館者サービスや鑑賞プログラムを開発・実践する取組です。

美術館は誰でも自分のペースで鑑賞を楽しむことができる場所です。学習やレジャー活動で来館しても不便さを我慢してきたという声に接し、障害者を

含め多様な人に美術館の魅力を伝えたいと強く意識するようになりました。

ただ、「美術館に来たら楽しいですよ」というだけでは足りません。当館では、聴覚障害や視覚障害、発達障害の人たちと対話しながら、手話通訳付き展示解説に始まり、視覚障害者向けツアーや多様な人が作品を通して交流するイベント、手話ビデオや触図などコミュニケーションツールの導入に取り組んできました。

さらに、2018年度から「ユニバーサル美術館展」を始めました。毎回、ユニバーサルな新たな取組を考えて、誰もが過ごしやすい展示や空間を提案する展覧会です。当館は所蔵作品による常設展（年3回展示換え）と特別展（企画展）を行っていますが、ユニバーサル美術館展をその中に織り交ぜて開催しています。

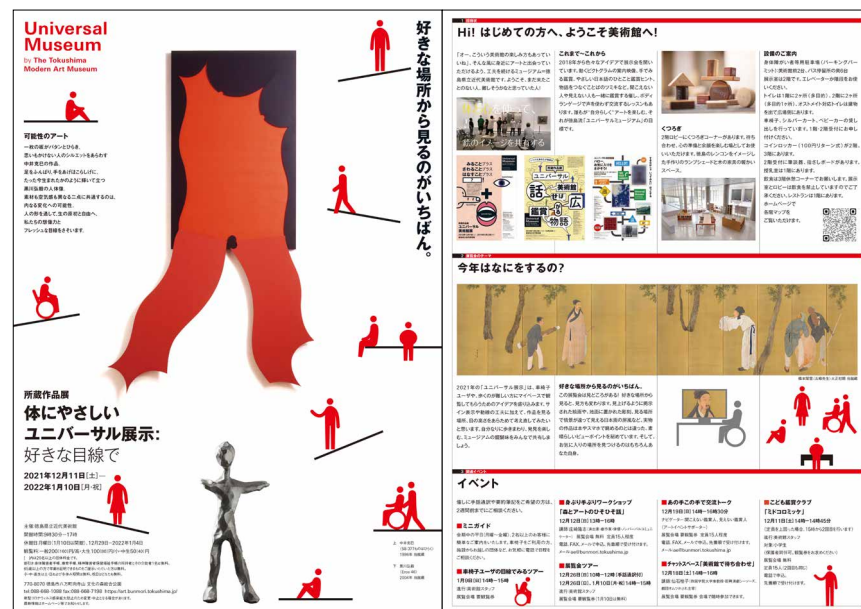
ユニバーサル美術館展で、
大事にしていることは何ですか？



美術館には、展覧会に合わせてある程度自由に会場をつくるという文化があります。それを生かして、美術館はどんな人でもアクセス可能であると思っています。ただのために、ユニバーサル美術館展では、多様な来館者に向けた実験的な取組を行って、こんな工夫はどうでしょうと提案をしています。

「何ができるだろう」と考えるとき、当事者がどんなことに困っておられるのか、それは聞いてみないとわかりません。まずは対話して、そこから問題点を考え、できる範囲で試します。平常時の展示についても、皆さんにニュートラルな気持ちで作品に出会ってもらえるように、という思いで品揃えしているわけですが、作品が並んでいるだけでは、手助けが欲しくなる人もいます。自分で積極的に文化施設を使いこなした経験の少ない人にとっては、やはり特に敷居の低いプログラムが用意してあったり、わかりやすい構えをしたり、間口を広げる工夫をしていないと入りにくいだろうと思うのです。そこでコミュニケーション面で工夫したり、従来と違う展示空間を作ったりした結果、障害の有無に関係なく、みんなに通用するサービスやプログラムが見つかります。「子どもと手を繋いで展示を見られて安心だった」「いつもこんなやさしい解説があったらいいな」などいろいろな反応が返ってきます。

また、間口を広げるのとレベルを下げるのは違います。難しければ簡単なメニューを用意するということではなく、同じコンテンツを見ていただき、障害の有無に関わらずお客様の楽しみ方に応じて、その作品のどこが面白いのか、多くの人に味わい、経験してもらいたい。そのためのさまざまな工夫が毎回必要になってきますし、頭を悩ませながら試行錯誤しています。



「体にやさしいユニバーサル展示：好きな目線で」2021年12月

「広がる鑑賞物語」では どのような工夫をされたのでしょうか？

2018年のユニバーサル美術館展では、触って鑑賞するコーナーなど、視覚だけに頼らない鑑賞方法を取り入れ、見える人も見えない人も鑑賞しながら交流する空間を提案しました。ただ、そうした視覚障害の人に向けた、視覚だけに頼らない鑑賞方法になじみのない人たちの姿も見られました。インクルーシブ・ワークショップを行って意見を聞くと、聴覚障害の人たちから、「見やすい掲示の工夫もしてほしいけれども、説明自体が難しい」「楽しみたいけれども、どうしても長文や文章の内容が引っかかる」と言われました。

そのため、「広がる鑑賞物語」展では、聴覚障害の人も楽しめる展覧会のあり方を探りました。例えば、長文の解説文を読むことにプレッシャーを感じるのであれば、文字数を減らしたり、大きな字にして、文章を分けたり、手元でも見られるようにするなど、わかりやすいデザインにしました。手話による作品解説ビデオも用意しました。

また、テーマを“物語”にしたのは、作品を鑑賞しながら自分の中に芽生えた新しい物語をお互いに伝えあって、深めていける交流の場にしたいと考えたからです。そのために、吹き出しの形で絵の感想や言葉が書かれたパネルを設置しました。パネルには「目が大きい」「かわいいね」といった鑑賞者のつぶやきや、作家による造形論からの抜き書き、さらには美術批評の文章など、さまざまな言葉がちりばめられました。来館者がそれらを見れば、自由につぶやいてもいいのだと感じ、美術鑑賞に気後れしていた気持ちが薄れるのでは、というねらいがありました。

このパネルは、人それぞれ、作品にいろいろなアプローチがあるということを見える化しています。1枚の絵の見方には正解があるわけではありません。これには聴覚障害の人に限らず多くの人から「こうしたパネルがあって楽しかった」という声が寄せられました。



「ミッツミキ」

た」という声が寄せられました。

聞こえの垣根を越えて言葉を共有するための、新たなコミュニケーション・ツール「ミッツミキ」も開発しています。「ぴかぴか」「にこにこ」「ちょっとにがて」「どきどきする」「いいにおい」「はじめて」「あたたかい」など短い言葉が点字とともに書かれている積み木で、その積み木を3つ並べて作品の感想を伝え合うというものです。

「体にやさしいユニバーサル展示：
好きな目線で」展

「好きな目線で」展では、 どのような展覧会を提案されたのでしょうか？

当館では、通路の幅を広くするなどの方法で、館内のバリアフリーを考えていたものの、車椅子利用者や背の低い人に対して作品の高さをどうするか

といった工夫ができていないことが気になっていました。初めての肢体不自由の人たちに向けての取組がこの展覧会でした。

まずは、車椅子を利用する人たちに意見を聞きました。こちらとしては、作品を展示する高さなどへの要望が出るだろうと予想していました。ところが、「作品が高すぎたら困るけれども、今の高さでも、人が横に除けてくれたら見える」と。一方、体験ワークショップとしてゆったりと案内するようなツアーを体験してもらおうと、「今日みたいに、人の支援があって、ペースを合わせてみんなと一緒にまわって見ていけるのが一番いい」という声が聞かれました。

「好きな目線で」展は、車椅子でも好きな位置から見られる空間づくりも含めて、“多様な目線”を体験する展覧会にしました。通常、美術館は、平均的な大人の身長に合わせて作品を展示していますが、それは来館者の多数派だからという理由です。もし多くの人が車椅子を使っていたら、展示の高さも変わり、作品の感じ方も変わってくるでしょう。車椅子の目線や小さな子どもの目線、立って見る、座って見るなど、見る高さで作品の見え方が違ってくことを体験として伝えたいと思いました。

展示では、誰もが見下ろす低い作品だけを集めたコーナーや、教会の彫像のように誰もが見上げて鑑賞する作品を集めたコーナーを設けました。また、ガラス越しに近寄って見るしかない作品では、ガラスケースの前にパソコンを置いて、誰もが手元で拡大して鑑賞できるようにしました。会場の一部に、高さ30cmの床上げのステージもつくりました。車椅子の人がそこに上がれば、立っている人の目線での作品鑑賞を体験できます。車椅子の人が見やすいように、上下同じ内容の説明文を表示した2段組解説パネルも設置しました。



「体にやさしいユニバーサル展示：好きな目線で」展

あの手この手で交流トーク

「あの手この手で交流トーク」は
繰り返し実施されていますが、
どのようなプログラムでしょうか？

ユニバーサル美術館展恒例のイベントで、障害の有無に関係なく、みんなで一緒に鑑賞して、意見を交換する鑑賞プログラムです。進行役は当館のアートイベントサポーターが務めます。聴覚障害や視覚障害のサポーターもいて、手話や筆談、ボディランゲージなどを使って、参加者と作品についての感想を伝え合います。



あの手この手で交流トーク

そもそもコミュニケーションには多様なやり方があります。例えば、手話は身振りや表情も含めてビジュアル化していて、表現がものすごく豊かです。いわばミニ劇場のような世界だと感じます。手話ができない参加者も、そんなやりとりに触れて、いつのまにか見よう見まねで手話的な動きをしたり、ボディランゲージを使って聴覚障害のある人とも自然に会話を交わすようになります。また、美術作品の前で、鑑賞者が体を使って作品の真似をしてみるということは、普段使っていない脳を使うということで、作品との新しい繋がりが生まれるという、意味のあることだと思っています。

美術作品の鑑賞は実は小説を読むのと似たところがあり、作品を見て自分のイメージをふくらませるところに、その面白さがあります。それをみんなで分かち合う。そうすることで、目の見えない人の絵の見方についても、最初は「どうしたらお手伝いができるかな」という感じでしか考えていなかった参加者が、そのうちにすぐ晴眼者である自分も大して作品が見えていないことに気づかされ、絵を見ていろいろ考えるようになる。そういう体験が大事だと思うのです。

「あの手この手」を何年も続けてきて、今や非常に面白い場になっています。高齢者から若い人まで、困りごとを抱えている人だけでなく、障害福祉の研究者や障害者支援の腕を磨きたいという人、ボランティアとして奉仕したい人、純粋に自分が楽しみたいという人もいて、多様な関わりを生む場になっています。皆さんと取組を蓄積してきたこの場を大切に継続していきたいです。

アートイベントサポーター組織は、 どのようにつくられたのでしょうか。

ユニバーサル事業に取り組んだ当初から、こちらで考えたサービスを当事者に享受してもらうだけでなく、当事者にも参画してもらって一緒に美術館を面白くしたいと考えていました。実際にサポーターを募集すると、障害者の鑑賞支援をしたいという人だけでなく、障害のある人からも応募がありました。聞こえない人と聞こえる人とが一緒に意見交換してプログラムを作ると、困っている人のための保障とか、無理して一緒にやってみるとかではなくて、困っていない人にとってもメリットがあるということに気づかされます。例えば、耳が聞こえない人が司会を務めることで、参加者は手話の魅力や豊かさに触れることができる。結果的には、美術館でのコミュニケーションが向上していくと思うのです。

サポーターには当初、触図の制作など、鑑賞支援グッズやコミュニケーショ

ン・ツールの開発・製作などを手伝ってもらいましたが、自分たちでつくった鑑賞支援グッズの使い方の説明や案内サポートなどに関わってもらうようになりました。さらに、筆談や手話が得意な視覚障害や聴覚障害のサポーターもいます。自分たちで障害の垣根を越えて交流できるような場をつくってみたいという提案がサポーターからあって、ユニバーサル美術館展シリーズの会期中に、イベント「あの手この手」が生まれました。今ではサポーターたちも経験豊富で、当事者ヒアリングなどでも、障害のあるサポーターがリーダーを務めるなど、当館のスタッフと並走する欠かせない存在となっています。現在、アートイベントサポーターは、高齢者、視覚障害や聴覚障害のある人など24名が活動中です（登録制）。

**「あの手この手」をはじめ、ユニバーサル美術館展などで
試みられている障害者対応の工夫や手法は、
常設展や特別展でも実施されているのでしょうか？**

手話通訳付き解説は、継続的に行うようになっていきます。また、「あの手この手」はユニバーサル美術館展の際の取組でしたが、今後は他の展覧会でも行いたいと思っています。

ただ、こうした取組を展覧会に必ず入れるという決め事にはしていないわけがありません。というのも、展覧会を企画する学芸員は自分のストーリーで会場レイアウトやディスプレイをつくるため、個々の展覧会で空間構成が変わります。例えば入り口から何メートルのところに肢体不自由の人向けの椅子を置くというルールをつくったとしても、適用は難しいのです。また、伝える情報の量もねらいも展覧会ごとに異なります。

むしろ、発想やマインドの共有が非常に大事だと考えています。同僚の学芸員たちも、ユニバーサル事業への取組やユニバーサル美術館展を見て、「そこまでやるんだ」「他の美術館と進め方や発想が違う」と感じていて、障害

者対応をルールにしくなくても、取り入れられるものは取り入れようという考え方が広がっているように思います。例えば、伝える情報の量は個々の展覧会で違いますが、視力の弱い人のことを考えれば、解説文はこれぐらいの文字数が限度ではないか、というように学芸員同士で話し合えるようになってほしいです。

もともとユニバーサル事業は美術鑑賞を中心とする展開であり、すべての展覧会に共通する要素はあります。その意味では、ユニバーサル事業のさまざまな活動で得た経験は、当然、他の展覧会にも適用できる可能性があります。その結果、ユニバーサル美術館展と特に謳っていないときにも、随所にそういう工夫があって、日頃は障害者に意識が向いていない人にも、「確かにこういうことが必要な人はいるな」ということを理解してもらえるとよいと思います。誰もがユニバーサルな展示に触れて、「自分はこれまでの展示方法でも困っていないと思っていたけれど、ユニバーサル事業として工夫された展示を見てみたら、自分にとってもメリットがあった」という新たな気づきが得られるような場面を増やしていきたいと考えています。

